

織田 昭 著外 ローマ書 13:8~10 12月1日

勧め

題：愛の負債

愛は技術であり、情熱である。(エーリッヒ・フロム)

【新改訳】

ローマ 13:8~10

【新改訳】

8 だれに対しても、何の借りもあってはいけません。ただし、互いに愛し合うことについて
は別です。他の人を愛する者は、律法を完全に守っているのです。

9 「姦淫するな、殺すな、盗むな、むさぼるな」という戒め、またほかにどんな戒めがあつても、
それらは、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」ということばの中に要約さ
れているからです。

10 愛は隣人に対して害を与えるません。それゆえ、愛は律法を全うします。

序論：

織田先生は、「夜明け前の、の主題の下、「誰に対しても、何も借りがあってはならない」、「一
切借りを作るな」とゆうより、「借りたままにしておくなあ」と語っておられます

山本泰次郎先生の注解書では、キリスト者は人から借りないだけではなく、人に貸すこと
もしないという意味に適用していました。

これは確かに信仰者の知恵であり、この言葉自体は「互いに愛し合うということは、例外だ」と
と重点を引きたたせるためだと思います。

ここには2つの解釈があり、1つは、「借りは必ず返済して残らないようにすべきだが、あ
いの務めだけは、返済しても返済し尽くせない」という意味に取る解釈です。

もう1つの受け取り方は、「愛の借りは、無理に返済しておあいこにしようとするな、それは
借りたままでよいのだ」という解釈です。愛を借りることで、私たちは謙虚になります。
特に神からお借りすることは大事です。9節の最後の段落は、救いの完成は近づいている、
その終りの時代に希望と言えるのは、その救いだけだと言う断言です（織田昭師）。

ローマ 13:8~10 で言われている悪を行ってはい

けないとすることは、正義の公式です。キリスト者は、借りても返すことができない借りを
すべきでない（フローレンス、ビシャウッド）。

キリスト者の市民義務は、「なんじら互いに愛を負うことのほか、見てのことを人に負うこ
とれ。罪人を愛する者は。愛は隣人を損なわず、是故、愛は律法を完成す」、8節の「負う」
という字は、「借金するという意味である」愛は負債のようなもので、これを払うべき義務
がある。なんじらの着るべき物は、すべて整っているのである。（パゼット。ウイルクス）。

「互いに愛し合うほかには、何人にも借りがってはならない。人を愛する者は、律法を全

うするのである」(8)。この言葉は、パウロがわれらのものを「負い目」あるものと理解したこと示している。神と人を愛することは、仰共同形成の基盤となると同時に、外に対して排他的な閉鎖性をもっていたからである。すべての人に対する旧約聖書の律法の成就であると言い切った言葉の中にも堅強な民族主義を克服したパウロの思想が明確に表現されていることになるのです。「愛は隣人に害を加えることはない、だから愛は律法を完成するものである」(13、高橋三郎師)。

一般社会においては、借りたものを放置してはならないが、愛し合うということについては借りを返すことはできないが、愛に積極的であれと、特に貸したものはよく覚えているのですが、借りた物は忘がちです。社会生活において、人間関係を形成する力となるものは解釈関係への誠実さです。私たちは返しきれない愛を受けている者です。私友は、感恩の心に励みたいと願います

(小宮山林也師)。

パウロは、「すべての人は上に立つ権威に従うべきである。なぜなら神によらない権威はなく、おおよそ存在している、神によって立てられたものであると規定しています」。ローマ12:21で、「悪に負けてはならない。

かえって善をもって悪に打ち勝ちなさい」という言葉があると思う。これが、国家権力や上に立つ権威にキリスト教信者の生きぬく姿勢であると思う。

パウロがここで言っていることは、1つの信仰の原則に立っているということである。神によって立てられているということは、神の支配を受けているものである、だから今国家権力が悪事を働くとしても、神の支配の中にあるのだから、神は長くお許しにならないということである。与えられたつつましい生活の中で歩いて行く中に、本当の生き方があるのでないかと思う(榎本保郎師)。

負債、それは相手に何がしかの負担をかけること、これが1面罪と見られております。「だれにでも借りを作るな、負債を造るのだ」とパウロは断言します。借りる=負債という言葉がオフェイレテです。人間は誕生から始まって、負債に負債を重ねて生きております。

しかしパウロは、果たすべき義務はすべて果たてしまえ、借りを作るなと言います。パウロは律法からの解放としてのキリストの救いを宣べ伝えて来たわけです。

それがローマ書のメインテーマです。私たちが果たすべき義務、借り、負債は、ことごとく払われてしまったのです。キリストの死によって贖われて余りあるのです。

「上に立つ権威に対する敬意」、それに例外があつて、「互いに愛し合うこと以外は」と付帯事項がついているのです。愛の本質は、愛せば愛すほど、愛さねばならないのが愛です。なお愛さねばならないという負債が残るのが愛で、愛の負債は返せないので、「人を愛する者は律法を全うするのである」(ローマ13:8b)。信仰とは私たちの神への応答を言い表したもので、ルターに始まります「信仰のみ」という主張は、私たちが神に愛されるために何の条件もつけられない、これが福音です。私たちの心を解放するのです。自由にされるのです。

これがルターのいう「キリスト者の自由」であります。

「主のあなたに求められることは、ただ公儀をおこない、いつくしみを愛し、へりくだつてあなたの神と歩むことではないか」（ミカ 6:8）、これをハバククは1つにまとめ、「義人は仰によって生きる」（ハバクク 2:4）と（高橋三郎「新稿ローマ書講義下」山本書店 180 頁）。
「人間が人間になるのは、自己を他者にゆだねることである」（ヤスパース）。「最早我生くるにあらず。

キリスト、我がうちにありて生くるなり」（ガラテヤ 2:20）。神様に委ねまかせて、主にあって生きていく時にいろんなものが実現していくのです。それらのものは神の国、神の義に添えて与えられるのです（奥村修武師）

ローマ 13:8~10 で、愛の負債について、学びました。主を愛し、隣人・特に拳で働く敵を愛することは、律法を全うすることを示されました。愛の負債は払い切れないものです、かえって愛の負債を負うことが神への愛を全とするのです。感謝しましょう。

お祈りします。